

(コロサイ二・六、七；マルコ四・三二、三三)

元旦。行きなれた道の景色が違った。まず見たのはパラグライダー、次に見慣れない人々。そして高麗神社への道には警備員。それだけではない。私の、そう十メートルくらい前を歩いてきた老人がやにわに立ちどまり、左向け左をして「ご来光」に向かつて最敬礼したのだ。しかも二回もだ。それはそれは優雅な所作であった。牧師館で生まれ、教会で育った私にはあまり縁のない、日本的な靈性を体験した瞬間であった。時にこれらの人々は元旦からはつきりとした目的をもつて行動していたと言える。あるものは新年の幸せを得るために神社を訪ね、かの老人はこれまた新年の祝福を得ようと太陽に向かって最敬礼をした。私とはいえば「ひとりライザップ」を継続すべく行きなれた道を歩いたのだ。このようにどんな行動でももし目標がはつきりしていなければ、それは有効なものになることは難しい。そこで今朝は本年の標語である「深まる」と、「広がる」のターゲットについて話してみようと思う。私たちは今年何に根ざしどこへ広がるかとしているのだろうか。聖書からその答えを得てみたい。

一、「キリスト」に根ざす

ある注解者によればコロサイ二・六、七はこの手紙の要約と考えてよいのだそうだ。ひとたびイエス・キリストを信じ、彼を心に受け入れたものは、キリストにあって歩んでいく（＝生き続ける）のだが七節にある「根ざす」と「立てる」の二つの比喩はその動作をよく現している。というのも原文では「根ざす」は一時的な過去を現す時制が使われているのに対し、「立てる」は継続を含蓄する時制が用いられているのである。つまりここから解することは私たちはキリスト者となった時点で、実にキリストに基礎づけられたということである。興味深いのは「コリント三・一一」においてパウロはキリストを建物の土台になぞらえ、他の土台を据えることの不可能性を説いていることである。一人人の手によつて植えられた木が、その土地を厭がって他の場所に移るだろうか。また土台の上に建てられた柱や梁が突如として隣的基础に移ることがあるだろうか。そんなことはあり得ないのである。私たちがキリストを信じ、そこに根ざしたということはそういうことなのである。それは移り気なものではなく、真実かつ変わることはない神の熱心によつてキリストの内に植えられたものこそ私たちクリスチャンなのだ。

二、「世界」に広がる

先に述べたように「根ざす」は一時的な動作であるのに対し、「建てられる」は継続的だ。友人の韓国人の牧師が「人間はみんな工事中の存在です」と言っていたが言い得て妙である。工事中の建物は変化していく。それは植物も同じだ。成長するのだ。イエスはその植物の成長を用いて、天国について教えられた。それがマルコ四・三一、三二に書かれている。当地の芥子種は直径一ミリほどの極小さい種であるが、育つと三メートルを超える灌木になるそうだ。だからこの譬えの眼目は「弱く、取るに足らないような小さいものが、成長と共に力強いものとなって影響をあたえる」ということに尽きる。要は天国は拡大するということだ。では私たちのキリストに根ざした生活はどこに広がるのだろうか。勿論最初は周囲からだろう。しかしひとりひとりがキリストに根ざし、そののちに触れ続けるなら、ラグビーではないが「世界を驚かせる」ことが出来る。実にキリスト教も小さくはじまったのだ。それはイエスと弟子たちのユダヤ教の小さなセクトでしかなかった。だが今やその影響力は全世界に及んでいる。そう考えるなら、私たちは信仰を個人の安心立命のみに限定するべきではない。むしろ世界に救い主キリストのインパクトを与えるべく、

世の光、地の塩として働くことこそ求められているのだ。

* * *

厳格な牧師の家に生まれた「彼」は早熟の天才だった。三歳で読み書きを、十歳でラテン語やギリシャ語をマスターしていたという。父の影響を受けた彼は一度は宗家の道を志したが、大学で無神論者のクラスメイトと出会った彼は信仰を骨抜きにされ「富や名誉」を求めめる普通の青年になってしまった。大学は主席で卒業したが、信仰はほぼダメになってしまった。しかし彼は偶然泊まった宿屋の薄い壁一枚隔てたところでの友人の死を体験したことから劇的に回心し、キリストに根ざした。その後彼は宣教師としてミャンマーに赴き、言語の才を生かして聖書翻訳に励んだ。しかし宣教は困難を極めた。誤認、逮捕、拷問、すんでのところでの死刑回避、そして糟糠の妻の死。不幸が彼を容赦なく襲う。更に悪いことに苦心の未発刊された聖書に興味を示す人も殆どいなかったという。そして彼は死んだ。だが今やミャンマーのクリスチャン人口は八%。そして彼、A・ジャドソンの聖書は今も使われている。キリストに根ざし、「世」に広がった生がここにある。キリストに根ざし、世に広がるものでありたい。